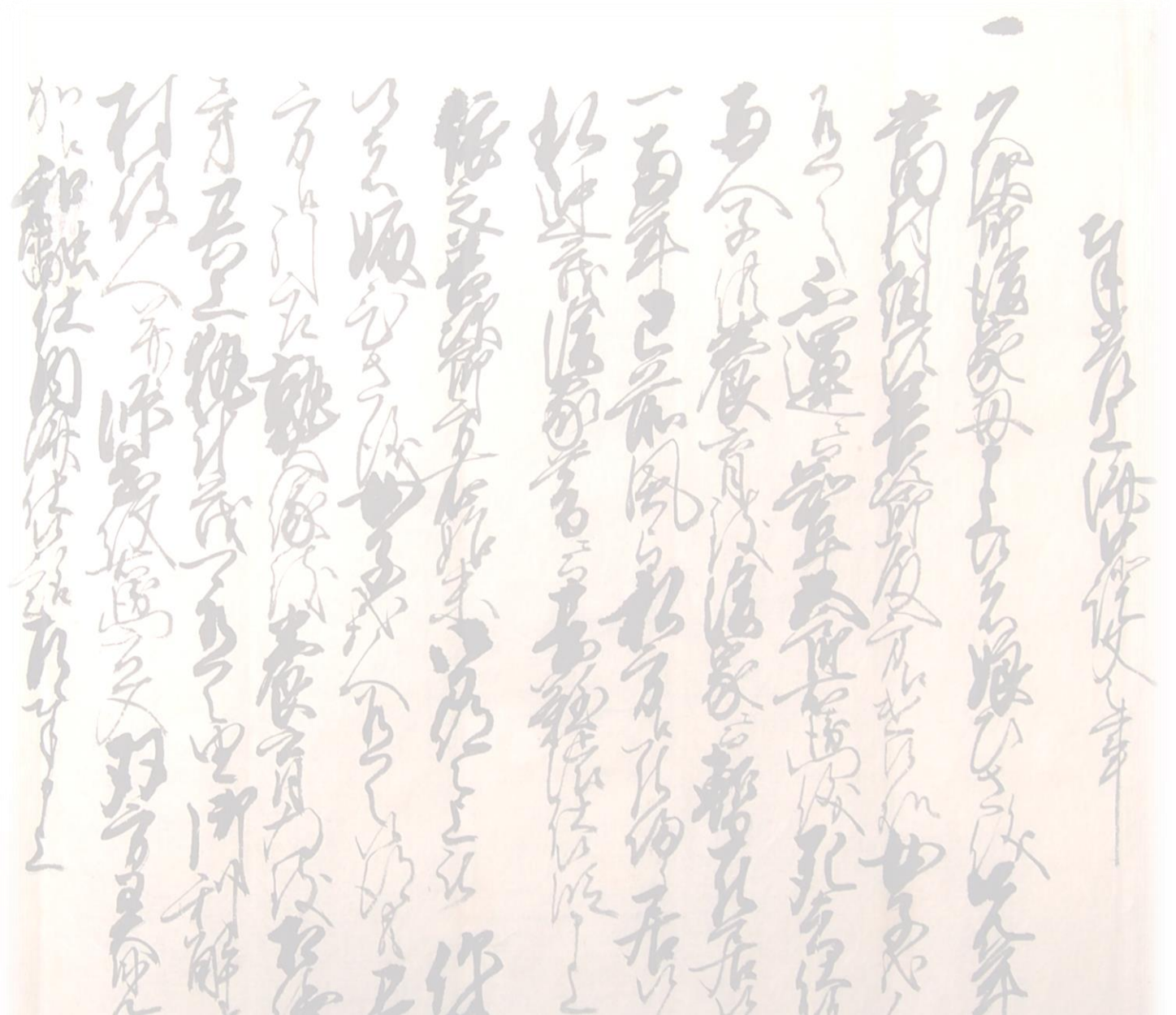

日本史学へ のご招待

ガイダンス資料

日本史学研究室パンフレット



1. 日本史学研究室の概要

日本史学は、日本列島の歴史を多面的かつ総合的に考究する専門分野である。研究の基礎は、古文書・記録・史書などの文献史料を正確に読み、内容を批判的に検討し、そこから論点を引き出して歴史像を構成することにある。

当研究室の教育・研究システムは、そのための力量を養成することをめざしている。

学生数

- ◆ 学部学生 … 49名
- ◆ 大学院学生（修士課程）… 15名（博士課程）… 29名

日本史学での学び

演習（ゼミナール）では、演習に出席する学生が報告者となって、文献史料を正確に解読し、優れた先行論文を批判的に検討することが中心となる。

講義では、各教員により〈史料をしていかに歴史を語らせるか〉を軸とした先端的な研究を披露する。

最近の日本史学が検討対象とする史料は、文献のみでなく絵画や文学、遺跡や遺物、民俗行事、地図や地名などへと広がっており、こうした広範な史料にも挑戦している。

またゼミナール参加者が課題史料の舞台となった地域を実際に見学するゼミ旅行、大学院生や社会人とともに、全国各地域に残された未整理の史料を調査・整理・保存を行う史料調査、現文書およびその複製を用いてくずし字史料の読解力を養う文書会、研究書・論文を読み批判的に討論する読書会といった各種の研究会など、専修課程の講義以外にも多様な学習の機会を得ることができる。

研究室の環境

東京帝国大学の国史学科の伝統を受けつぐだけに、研究室の図書は充実しており、また学生・大学院生から教員までがともに語り合う開放的な研究室の雰囲気の中で、教員・助教や先輩の大学院生から懇切な指導・助言を受けることができる。また、関係の深い部局として東京大学史料編纂所があり、その所蔵する原本・影写本・写真版などの膨大な史料を利用する便宜がはかられるほか、同所員の優れた日本史研究者の指導を仰ぐこともできる。

卒業論文と進路

学部での勉学で重視される卒業論文は、自ら日本史上の課題を設定し、研究対象となる史料群や先行研究と格闘して、オリジナルな論点を積み上げ、それを説得力ある論文に結晶させることになる。その経験は、人生にとってかけがえのない財産になるはずである。

卒業後は、一般企業のほかマスコミ関係・教職などに就職する者と、大学院に入学して専門研究を続け、修士・博士論文の作成を目指す者とに分かれる。

【2018年度 企業就職者内訳】

出版・印刷……0名 新聞・放送……3名 情報通信…1名 コンサルタント…1名

金融・保険……1名 製造……3名 商社・流通……1名 建設・不動産……1名

運輸・郵便……2名 サービス……0名 教育…1名 官公庁…4名

※『PROSPECTUS 2020』213頁より

【2019年度 企業就職者内訳】

新聞・通信……2名 広告……0名 コンサルタント……3名 金融・保険……1名 製造……3名

商社・流通……0名 建設・不動産……0名 サービス……2名 教育……1名 官公庁……2名

※『PROSPECTUS 2021』216頁より

教員紹介

現在、研究室の専任教員は7名で、古代（大津透）・中世（高橋典幸・三枝暁子）・近世（牧原成征・村和明）・近現代（野島[加藤]陽子・鈴木淳）の各時代を担当している。政治・経済・社会・対外関係・文化・史料論などの諸分野をカバーするバランスのとれた構成であり、時代の枠を超えて積極的に発言しあう気風をもっている。

教授 大津 透

専門は、日本古代史で、特に律令法や国家財政を研究の中心とし、日本古代の律令制を東アジア世界の中で位置付けることを目的とし、あわせて日本固有の部分 を明らかにすることにより古代天皇制の特質を剔判することをめざしている。また平安時代に律令制が展開するという視点から、藤原道長に代表される摂関政治期の国制の基礎的研究をすすめ、この時代のいわゆる王朝文化についても中国文化の受容定着という点から再評価している。唐律令制の研究の一環として龍谷大 学所蔵のトルファン将来の大谷文書の復原研究もすすめており、東洋史研究・敦煌吐魯番学にも貢献している。

教授 野島(加藤) 陽子

日本史学のなかでの専門領域は近現代政治史で、外交と軍事の両面から近代日本の特質を研究している。第一次世界大戦から太平洋戦争にいたるまでの日本をとりまく国際環境や国際秩序はいかなるものであったのか、また国内政治において大きな影響力をもった陸軍はいかにしてその政治力を拡大させたのか、戦争の世紀=20世紀前半の日本を、内と外から考えている。具体的には、アメリカによる秩序形成と日本の関係、戦争の形態が変容したことによる政治と統帥両者の関係の変化に着目している。外交の中の軍事、軍事の中の外交という切り口を念頭に置きながら史料を読み、『模索する 1930年代 -日米関係と陸軍中堅層』『徴兵制と近代日本 -1868-1945』『戦争の日本近現代史』などを著した。今後は、パリ講和会議と日本の外交、近衛新体制と対中政策についても、研究を広げたい。

教授 鈴木 淳

専門は日本近代史、とりわけ明治時代の社会経済史である。学生・助手時代には機械工業を研究し、課程博士論文を『明治の機械工業』として刊行した。その後、駒場で教養教育にあたりながら、技術や制度の導入を軸により幅広く近代史を叙述することを試み、前期課程での授業内容を中心にした『日本の近代 15 新技術の社会誌』と『日本の歴史 20 維新の構想と展開』、そして対象をしばった『町火消たちの近代』といった概説的な本を書いた。

准教授 牧原 成征

日本近世史を専攻している。時期的にはとくに中世末から近世前期にかけての社会の変容に関心がある。地域やテーマとしては、信州・近江・関東等の村落構造や土地制度、兵農分離のプロセスや奉公人の問題、商人やその仲間、流通・交通、かわた等の身分とその集団などを検討しており、講義ではそれらの一端を提示・紹介する。演習では、都道府県域など、ある一定の地域をとりあげ、そこに残された古文書等を用いて、史料批判や読解、論点の発見や展開の方法などについて議論する。著書に『近世の土地制度と在地社会』（東京大学出版会）がある。

教授 高橋 典幸

日本中世史を専門としている。なかでも武家政権の歴史および朝廷をも含んだ政治権力総体に占める武家政権の位置づけに関心がある。その一環として武家政権の組織に注目し、鎌倉幕府の御家人制について軍事的側面からその特質にアプローチした。その成果は『鎌倉幕府軍制と御家人制』にまとめた。なお、鎌倉幕府の歴史を論ずるに際しては、『吾妻鏡』は必須の史料であるが、『吾妻鏡』そのものも検討対象であり、『平家物語』や他の同時代史料と比較検討しつつ、その分析を進めているところでもある。また、近年は社会的・地域的側面にも関心を広げ、続く室町幕府の成立過程・特質も検討課題とし、13世紀後半のモンゴル襲来から14世紀末にいたる南北朝期を一貫する歴史叙述の構築をめざしている。

准教授 三枝 暁子

日本中世史を専門としている。主に京都の寺社史料を素材として、寺院社会および都市社会の構造について分析をすすめている。具体的には、中世の「寺社勢力」を代表する位置にあった比叡山延暦寺、およびその末社の史料を分析しながら、13世紀以降に進展する寺社の都市支配や集団編成等について検討している。その成果の一端を、『比叡山と室町幕府—寺社と武家の京都支配—』（東京大学出版会、2011年）にまとめている。また近年は、寺社による都市支配が衰退して以降の都市社会構造にも関心をひろげ、とくに豊臣政権期前後の都市共同体論・社会集団論の検討をも進めている。

准教授 村 和明

日本近世史を専攻している。天皇・朝廷、近年は豪商三井家をも分析対象とし、権力構造の変遷や大組織の制度化過程の特質などについて検討している。これらを後世の歴史編纂や史料論・アーカイヴズ論などと関連づけたいとも考えている。時期的には、現在17世紀半ばから18世紀までにもっとも関心がある。講義では、皇位継承・上皇・女帝などに焦点をあて、近世の朝廷の歴史を、史料を提示しながら概説する。演習では、政治史に関する込み入った史料の正確な読解を目指す。著書に『近世の朝廷制度と朝幕関係』（東京大学出版会）がある。